

**2007年度 文部科学省現代GP 「大規模私大での大学
無業者ゼロを目指す取り組み：学生が行う『キャ
リア相談』による職業意識の質的強化」フォーラム
報告**

著者	山田 泉
出版者	法政大学キャリアデザイン学会
雑誌名	生涯学習とキャリアデザイン
巻	6
ページ	261-263
発行年	2009-02
URL	http://doi.org/10.15002/00007559

2007年度 文部科学省現代GP

「大規模私大での大卒無業者ゼロを目指す取り組み
—学生が行う『キャリア相談』による職業意識の質的強化—」
フォーラム報告

法政大学キャリアデザイン学部教授 山田 泉

2008年3月14日（金）法政大学ボアソナードタワーにおいて、本学部の文部科学省現代GP「大規模私大での大卒無業者ゼロを目指す取り組み—学生が行う『キャリア相談』による職業意識の質的強化—」についてのフォーラムが開催された。フォーラムは本プログラムの中間報告として、広く学内外から評価及び問題点のご指摘をいただく機会と位置づけられている。コメントーターを含め、フロアーから、また実際に実習を行った学生からも率直な声がよせられ、意義のある討論が行われた。参加、協議いただいたかたがたに感謝したい。

かかわりながら学ぶ「キャリア相談実習」
—法政大学キャリアデザイン学部 現代GPフォーラム—

◆プログラム

<第I部>13:00～15:00 報告「キャリア相談実習：1年半の振り返り」

「キャリア相談実習のねらいと取り組みの経緯」

笹川 孝一 法政大学キャリアデザイン学部教授

「キャリア相談実習のカリキュラム開発と実施」

田澤 実 法政大学キャリアデザイン学部助教

上原 加津美 法政大学キャリアデザイン学部キャリア相談アドバイザー

「効果測定テストの開発」

梅崎 修 法政大学キャリアデザイン学部准教授

「キャリア相談実習に参加した学生の声」

実習に参加したキャリアデザイン学部生

1年生 橋本明佳（はしもとはるか）

・オープンキャンパススタッフ

・キャリア相談事前指導

1 年生 松島良太 (まつしまりょうた)

・ヤングジョブスクエアよこはま

事前指導の授業サポーターとして

2 年生 渡部晴貴 (わたなべはるき)

・キャリア相談事前指導

・グローリービレッジ (映像サークル)

「キャリア相談実習の今後の課題」

児美川 孝一郎 法政大学キャリアデザイン学部教授

<第Ⅱ部> 15:20~16:50 ディスカッション

「コメント」

菊池 武 剋 東北大学教育学研究科教授

伊藤 文 男 武蔵野大学学生支援部キャリア開発課

1 概要

前半の第Ⅰ部は「キャリア相談実習：1年半の振り返り」と題し、「取り組み」側であるキャリアデザイン学部のそれぞれの担当者及び履修学生からの報告及び次年度に向けた課題と方針の発表を行った。

まず、前学部長笹川孝一が文部科学省現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム（実践的総合キャリア教育の推進）「大規模私大での大卒無業者ゼロを目指す取り組み—学生が行う『キャリア相談実習』による職業意識の質的強化—」と本学部教育の理念との関係について説明をした。本学部の理念である人とかわりながらともに成長していく生涯学習の資質・能力の養成と学部初期教育としてキャリア相談事前指導及びキャリア相談実習の関係を、後者を学部教育全体に血液を送る心臓に例えて説明した。

次に、キャリア相談アドバイザーの上原加津美と指導担当教員の田澤実が、「キャリア相談実習のカリキュラム開発と実施」と題して、キャリア相談事前指導の全12回のカリキュラムを提示し、それぞれの授業の意義と流れ、受講した学生へのアンケート結果等を報告した。一方、キャリア相談実習についてはその実施状況を実習先の例も提示し具体的に報告した。

続いて、効果測定テスト「CAVT Career Action-Vision Test」開発から実施に至る経緯と今後の利用方法について、効果測定班教員である梅崎修から報告した。

その後、キャリア相談実習の制度発足以前から学生の自主活動を行っている2年生一人とキャリア相談事前指導とキャリア相談実習を履修している1年生二人からそれぞれ自らの体験について報告し自らにとっての実習、活動の意義を指摘した。

そして、第Ⅰ部の最後として、学部のGP主任の児美川孝一郎から今後の課題について、本学部の学生の特性として自主的活動に参加する学生が多い中、消極的な学生の肩を押す目的があったが果たしてその効果が上がっているか、学部のほかの授業、活動等と有機的なつながりが持てているか、授業ということで自主活動の意義を潰すことにならないかなども点検しながら進める必要性和卒業生との連携を目指すことの重要性などの指摘があった。

休憩を挟んだ後半の第Ⅱ部は、東北大学大学院教育学研究科の菊池武剋教授と武蔵野大学学生支援部キャリア開発課の伊藤文男課長のお二人のコメンテーターからコメントをいただいた後、フロアとの質疑応答となった。

菊池教授からはキャリア教育の概念の広がりを感じられ、これまでの出口支援でない広い意味でのコミュニケーション教育となっていてそれはそれでよいが、プロジェクトタイトルと中身の違いがあるとの指摘があった。相談実習の事前事後の対応をしっかりとやって、心臓が止まってもよいように学部のほかの授業、活動にも実習をいかす工夫が必要ということであった。効果測定は、興味深い能力ではなくて、意識や態度を測定するのは難しいのではないかという指摘もあった。

伊藤課長からは、武蔵野大学での取り組みの紹介があった後、効果測定などでは、伸びた後の落ち込んだときにいかにフォローするかが大切ということと、他者を受け入れる活動は、仕事上でも必要な能力を育てることになるはずといった指摘があった。

会場との質疑では、学生に対してこのプログラムに参加した意義をどう思うかと問うものが多くなった。

2 今後への対応

今回のフォーラムの主な目的は、取り組みの中間報告とそれへの評価や意見をいただくというものだったが、質疑応答や事後のアンケート

を見るかぎり、評価は「実験的な試みで、力を入れて取り組んでいるのが分かったので、しっかりとやって最終報告でその成果を示すことを期待する」というようなものと思われる。中には、「法政規模の大学であればできて当然で、問題なのはそこまで達しない学生をかかえた大学においていかに取り組むかだ」といった声も聞かれた。しかし、本学部でも消極的な学生に人とかかわることから学んで成長するきっかけを提供しようという目的も大きいので、落ちこぼれを出さない工夫が必要と考える。いまだ、実習先の確保も進行中の状態であり、模索は続くが、この取り組みがなかったら初期教育時に進んで人とかかわることがなかったような学生から、「体験できてよかった」という声が寄せられることが多く、すべての学生が体験をして単位を取ってもらえるよう工夫していきたい。幸い専任教員が総力を挙げて授業に臨み、実習先の確保に努めている。本プロジェクトが本学部のコンセプトと合致していると評価できるが、来年度は効果を最大限に生むべくその方法の工夫に継続して取り組んでいきたい。

※本稿は文部科学省ホームページに掲載されたものに加筆訂正したものです。